
Love forever

雪原歌乃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Love forever

【Nコード】

N9372Z

【作者名】

雪原歌乃

【あらすじ】

十二月二十四日　クリスマスイヴ、俺の誕生日でもあり、大切な存在を失った日。無気力のまま生き続ける俺の前に現れたのは、外見は美しいが口の悪い自称「天使」だった。初めて逢ったはずの女に、俺は何故か、この一年間、誰にも言えなかった本音を口にする　（PG12指定）

第一節（前書き）

『Love forever』は、競作小説企画「冬祭り」様出品作品です。

ファンタジー要素有りの現代恋愛で、傾向としては切なめ、また、死描写に加えてキスシーンがございますので、PG12指定とさせていただきます。

全体的に重いテーマですが、最後には少しでも温かな気持ちになつて頂けるようにとの思いを私なりに籠めました。

拙きものではございますが、是非とも御覧下さいませ。

使用お題：雪、星空、クリスマス、白い息

第一節

十二月二十四日、クリスマスイヴ。辺りの風景は、その名の通り、クリスマス一色となる。

煌びやかに飾り立てられる装飾、エンドレスで流れ続ける、定番のクリスマスソング、互いの手を取り合い、寄り添うように過ぎ行く男女の若いカップル

何もかもが浮かれている街中を、俺はただ、黙々と歩き続ける。

もちろん、独りだけているのは俺ばかりではない。けれども、心なしか、カップル達の視線が痛い。思い過ごしかも知れないが、若いくせに恋人の一人もいない淋しい男、などと、密かに笑われているような気がした。

独りで悪かったな……

無性に腹が立った俺は、一組のカップルと擦れ違いざま、冷ややかな視線を投げ付ける。だが、カップルは俺に睨まれた事に気付く様子もなく、暑苦しいまでにイチヤイチャを繰り返している。

誰からも相手にされない自分。心の底から溜め息が漏れた。

本当に、俺は一体何をしてるんだ。よくよく考えてみたら、勝手に苛々して、幸せ全開な周りに八つ当たりしているだけじゃないか。

俺はもう、幸せになんてなれねえんだから……

俺は、爪痕が残りそうなほどに強く拳を握り締め、足を止めた。

夜空を仰ぐと、星が辺り一面に散りばめられている。美しくて、けれども、あの時の事を彷彿させ、胸が酷く締め付けられる。

と、俺の右腕に、強い衝撃が走った。ハツとして、地上に視線を戻すと、女子高生らしき少女と目が合った。彼女は、舌打ちしながら俺をギロリと睨んだ。そして、一緒にいた女友達と、「何あいつ、チョーうぜえ!」、「つつか邪魔だし!」などと、わざとらしく大声で言い合っていた。

彼女達の無遠慮な態度に、俺はまた、苛立ちが募ったが、言って

る事は尤もだから、返す言葉など見付かるはずもない。同時に、彼女達のお陰で、いつまでもこんな所を彷徨っていても仕方ないと、改めて思えた。言い方はともかく、感謝すべきかも知れない。

人混みを掻き分けるように、街中の喧騒から離れた俺は、外れにある公園の近くまで来ていた。

ずっとざわめきの中にいたせいか、あまりにも静か過ぎて、耳鳴りがザワザワと鳴り響く。

今季に入ってから雪は降ったが、まだ、積もるほどの量は降っていないから、当然、公園内のどこを見渡してみても、白い塊は全くない。

寒さは日に日に増してゆくのに、冬らしくない冬だと、俺は改めて思った。もしかしたら、年が明けてから、一気に降り積もる事も十分にあり得るが。

俺は公園の中に足を踏み入れると、迷う事なく、奥まった場所にある青い古びたベンチに向かい、そのまま腰を下ろした。

吐き出される白い息さえ凍ってしまいそうなほどの寒さ。そんな中で、俺は、自らの身体を両腕で抱き締めながらぼんやりとしている。

傍から見たら、異様な光景だ。いや、俺自身が一番、何をしてんだかと呆れている。けれども、明るさと温もりに包まれた我が家に帰ろうという気持ちには、到底なれなかった。

「決して忘れちゃならねえんだ……」

俺は独りごち、ダウンジャケットのポケットを弄って四角い箱を取り出した。

片手で握っただけで、すっぽりと隠れてしまいそうなほどのちっぽけな白い小箱。左手に載せ、反対の右手でそつと蓋を開けると、アルファベットが散りばめられた、シルバーメッキのジップポータールーが姿を現す。

L o v e f o r e v e r

綴られている文字自体はシンプルだが、ジッポアの金属以上に重みを感じる。

しかし、それ以上に胸を痛めるものは、二つ折りにされた小さな白い紙に書かれたメッセージだった。

お誕生日おめでとうございます。

あなたがこの世に生まれた素敵な記念日、これからも一緒に祝いさせてくれませんか……？

男のものとは違う、繊細で柔らかかさのある癖字だ。メッセージを書いた本人の深い愛が、文字の一つ一つによく表れている。

「ごめん……」

今、ここにはいない送り主に向かい、俺は謝罪を口にした。

両肘を膝に載せながら、箱ごと両手で包み込んだジッポアを額に当て、祈りを捧げるように送り主を想う。

脳裏に浮かぶのは、後悔の二文字のみ。もし、奇跡を起こしてくれるのなら、あの瞬間に戻して欲しい。今ならば、送り主を傷付ける事は絶対ない。俺は心から思った。

どれほど、同じ姿勢でいただろうか。ふと、暗がりの中で、仄かに明かりが浮かんでいるのを感じた。

俺は怪訝に思い、顔を上げる。と、そのまま瞠目してしまった。

ベンチに坐っているすぐ目の前で、一人の女が立っている。それだけならば、別に驚きもしなかっただろう。問題は、その女の、異常としか言いようのないファッションだった。

ダウンジャケットを着込み、マフラーを巻いていても凍えそうなほど寒いのに、女の服装は、見た目からしても寒々とした白いロング丈のワンピース一枚のみで、足元は、靴も履いていない全くの素

足だった。

こいつ何者だ……？

俺に限らず、誰が見たってそう思うだろう。

背中まで真っ直ぐに伸びたブロンドの髪に、深海を彷彿させる蒼い双眸。外見は申し分なしの美人だが、それでもやはり、妖しい女という認識は、どうあっても拭い去れるものじゃない。

女は、表情一つ変えず、俺を見下ろしている。深い蒼にジツと見据えられると、こっちも居た堪れない。

俺は、女から視線を逸らした。女の双眸には、何もかもを透かし見てしまいそうな、そんな強い力が働いているような気がしたのだ。

「はあ……」

暫しの沈黙の後、女から大仰な溜め息が漏れた。かと思ったら、「いつまでだんまりを続ける気だよ？」と、おおよそ、女の外見からは想像も付かないほどの荒い語調で訊ねられた。

「こっちは折角、あんたに呼ばれたからわざわざ来てやったのに……。私だつてさ、年がら年中暇つてわけじゃないんだからね！」

呼んだ？ 俺が？ この女を……？

女の言っている意味が分からず、俺は眉間に皺を寄せながら首を捻った。そもそも、俺は人を呼んだ覚えがない。それ以前に、この辺りには、俺以外は誰もいなかったはずだ。

「あんた誰……？」

まず、真っ先に浮かんだ疑問を投げかけた。

女は、先ほどまでのポーカーフェイスを崩し、俺と同様に眉を顰める。そして、またしても、こっちが絶句してしまうような事をサラリと告げてきた。

「私？ 私は天使だよ。見て分かんない？」

いや、分かんねえし……

言葉には出さなかったが、心の中で即座に突っ込みを入れた。呆気を取られながら女を見つめていると、女はまた、盛大に溜め息を吐いた。

「信じてないね？」

信じる信じない以前の問題だろ、とは言えなかった。口を開こうとしたら、女に鋭い視線を向けられてしまったからだ。

女には、口を噤ませてしまっほどの眼力が備わっている。天使よりも、寧ろ、魔物と名乗られた方が納得出来る。

「私はれっきとした天使だよっ！」

自称 天使 は、更に眉を吊り上げ、声を荒らげた。もしかしてこの女、他人の心の中が読めるのか。

「人の心を透かし見るなんて朝飯前だよ！ てか、魔物 だなんて随分な言い方じゃないか！ こーんな麗しい容貌を持った魔物がどこにいるってんだいっ？ ええっ？」

今にも噛み付きそうに、女は俺に顔をギリギリまで近付けてくる。俺はベンチに腰かけたまま、それでも、何とか女から逃れようと仰け反った。

「すみません……」

ここはもう、謝るしかない。非常に不本意ではあるが、これ以上女に詰め寄られては堪ったものではない。

俺の謝罪に、女は満足したのか、ようやく離れてくれた。だが、苦虫を噛み潰したような表情に変わりはない。

「取り敢えず話を戻そうか」

女は左手を腰に当てた姿勢で、わざとらしく咳払いを一つした。

「あんたさつき、強く想ってただろ？ 『もし、奇跡を起こしてくれるのなら、あの瞬間に戻して欲しい』って。」

あの瞬間 つまり、昨年のお今日だね？ そいつの送り主が死んでしまう二時間前」

女は淡々と語ると、俺の手に握られているジッパーに向けて顎をしゃくった。

女の言葉に、俺はもう、一々驚く事はなくなった。天使だろうと魔物だろうと、とにかく、この女は、俺の全てを見通している。現在だけではない、過去の事も全て。

「俺が、あいつを殺した……」
ジッポーに視線を落としながら、俺は、今まで誰にも言えなかった本音を漏らした。

時は、昨年の十二月二十四日に遡る

第二節

俺は、職場の同僚だった永瀬砂夜ながせつやに、帰りがけに呼び止められた。砂夜とは同期で、好きな音楽や本の趣味が共通していた事もあり、男女という隔たりもなく、すぐに意気投合した。

砂夜は、どちらかと言うと、男のようにサツパリとしていて気丈な女だった。

例えば、俺が仕事でへまをして落ち込んだ時は、持ち前の明るさで励ましてくれたり、仕事のノルマが果たせずに残業せざるを得なくなった時は、コンビニで買ったパンとペットボトルのお茶を持って現れた。そして、要領の悪い俺に呆れつつ、それでも、さり気なく手を差し伸べて手伝ってくれた。

俺の中では、砂夜は、性別を超えた良き友だった。見た目は目鼻立ちのすっきりした美人だったから、一部の男子社員からは密かに持て囃されていたようだが、少なくとも俺は、砂夜を 女 として意識した事はなかった。

だから、呼び止められた時も、単純に、一緒に飯に行こうと誘われただけだと思っていたのだ。

俺は砂夜に連れられるがまま、市街地の外れにある和食専門店に行った。

「おい、ここ高いんじゃないの？」

いかにも敷居の高そうな店構えに、俺は尻込みした。

だが、引いている俺とは対照的に、砂夜は堂々としたものだった。

「だーいじょうぶだって！ それに今日は宮崎みやざきの誕生日でしょ？

ちよつとぐらい奮発しなきゃ！」

「へ？」

俺はこの時、非常に間抜けな顔をしていたかも知れない。

砂夜は俺の表情を見るなり、目を見開いた。

「あんたまさか……、自分の誕生日を忘れてたんじゃないでしょうね……？」

その まさか だった。そもそも、誕生日というイベントに浮かれるのは子供の頃だけで、年月を重ねる毎に、あまり重要視しなくなる。運転免許の書き換えや、新たに行った病院で問診票を記入する時に、改めて、自分も年を取っていたのかと認識するくらいだ。

「まあ、あんまり執着し過ぎてる男ってのもどうかと思うけどさ」
砂夜は苦笑いを浮かべながら、先に立って、木製の扉に手をかけて開ける。

店内には、カウンター席と小上がりの座敷。そして、店の一番奥を見ると階段もある。訊いてみた所、どうやら二階は、宴会用の大部屋として開放しているらしい。

当然ながら、二人きりの俺達は二階には行かず、一階の座敷に席を取った。開店して日が浅いであろう店内は、埃一つ見当たらないほど清潔感に溢れている。

「宮崎って好き嫌いなかったよね？」

お品書きを握り締めながら、砂夜が訊ねてきた。

「ああ。特に食えねえもんはないけど」

俺の答えに、砂夜は、「よし！」と頷き、大声で店員を呼ぶと、お品書きを指差しながら注文していた。

俺は口出しする気もなかったから、砂夜と女性店員の遣り取りを眺めながら、熱いお茶をゆっくりと啜る。

女性店員が去ってから、砂夜はお品書きを壁側に立てかけ、頬杖を突いて俺に向き直った。

「誕生日がクリスマスイヴって素敵だよね」

そう言いながら、砂夜が眩しそうに俺を見つめる。

「誕生日としてはこれ以上に憶えやすい日はないと思うけど、それでも完全に忘れちゃうなんてね……。でも、宮崎らしいと言えば宮崎らしいよね」

「悪かったな」

無然として俺が言うと、砂夜は、困ったように眉根を寄せながら苦笑した。

「別に悪いなんて一言も言っていないじゃん。それに、さつきも言ったけど、変な所で執着心丸出しの男よりもサツパリしてて好感持てるし。」

宮崎は知らないだろうけど、実はあんた、女の子達に結構モテてるのよ？ クールで落ち着きがあってカッコイイ、って。 まあ、実際は、クールで落ち着いてるんじゃないかって、ただの天然ボケ なんだけどねえ」

屈託なく笑う砂夜に、俺は、怒る気にもなれなかった。

「それを言ったら、永瀬だっておんなじだぜ？」

俺の言葉に、砂夜は一遍に笑いを引つ込めた。

「はあ？ 私も一緒？ あんたと？ どこが？」

唇を尖らせながら顔を突き付けてきた砂夜に、俺は笑いを噛み殺しながら続けた。

「美人だけど、飾らないし嫌味がないからいい、って、男共がお前の事を言ってたぜ。けど、飾らない っていうのは、裏を返せば、

色気ゼロ っていう事だしな。素の永瀬を知ったら、男共は相当幻滅するだろうなあ……」

「ひつど！ 宮崎のくせに、よくもそんな口を叩いたもんだわ」

口ではこういいながらも、砂夜は別段、心底腹を立てている様子はなさそうだ。「もう」と、溜め息と同時に呟くと、顔を綻ばせた。

しばらくしてから、注文を取りに来た女性店員と別の女性店員が二人がかりで、瓶ビール一本に、料理一式が載った盆とコップを、それぞれ二つずつ持って来た。

よく見ると、刺身と天ぷら、茶碗蒸しと小鉢、更には蕎麦と炊き込みご飯まであって、かなりの量だ。しかも、それぞれの料理は、目でも楽しめるようにと意識しているのか、その辺の居酒屋と違い、上品に美しく盛り付けられている。

一体幾らするんだ……？

値段がどうしても気になった俺は、お品書きに手を伸ばそうとする。が、それを砂夜は目聡く見付け、素早く俺の腕を掴んだ。俺よりも細い腕をしているくせに、握力はかなりなものだ。

「値段を調べようなんて無粋な真似はしない事」

砂夜はニツコリと、しかし、有無を唱えさせぬ語調で俺に言った。

俺は黙って頷いた。結局、砂夜には敵わない。

「ほら、コップを持った持った！」

砂夜の手がようやくやく離れてから、俺は促されるまま、コップを手にした。

砂夜はそれを見届けてから、先ほどまで俺の腕を握っていた右手でビール瓶を持ち、琥珀色の液体を注いでゆく。寸での所で泡が溢れそうになったが、砂夜は器用に注ぐのを止めた。

「今度は俺に貸せ」

俺は半ば強引に砂夜からビール瓶を取り上げた。

砂夜は苦笑しつつ、それでも素直に、コップを持ち直し、俺に傾けてくる。

俺の注ぎ方がイマイチだったのか、砂夜が注いでくれたのと違い、泡は気持ち程度しか入らなかった。

「そんじゃ改めて、誕生日おめでとー、アード、メリークリスマスー！」

砂夜の号令と共に、互いのコップが、カチンと乾いた音を立てながらぶつかり合う。

それにしても、幾らイヴとはいえ、和食屋で『メリークリスマス』は、あまりにも浮き過ぎている。

不意に、カウンターのの方を一瞥すると、先ほどの女性店員二人が、小首を傾げる仕草をしながらこちらを見ていた。だが、俺と目が合った途端、ばつが悪そうに、慌てて顔を逸らせてしまった。

砂夜は、俺と女性店員がそんな遣り取りをしている事も知らず、コップのビールを一気に呷り、既に二杯目を手酌で注いでいた。

「おい、空きつ腹にいきなり呑んだら悪酔いしちまうぞ?」

俺が忠告しても、砂夜は、「平気平気!」と、笑っている。

「私は今まで、酒に吞まれた事なんて一度だつてないんだから。それより、宮崎の方が先に潰れちゃうんじゃない?」

「余計なお世話だ!」

そう言ったものの、砂夜の指摘は見事に的を射ている。

俺も、酒はそれほど弱い方ではないとは思っているが、砂夜があまりにも強過ぎるから、過去に何度も潰されてしまっている。何となく、今日もとことん付き合わされ、また、砂夜に醜態を晒す羽目になりそうな予感がする。

俺は、一杯目のビールを半分ほど呑んでから、海老の天ぷらに箸を伸ばした。温かい天つゆに付けて口に運ぶと、サクリと良い音が響き、旨みが口一杯に広がる。

「私も食べよつと!」

黙々と箸を進める俺を見て、砂夜もやっとで食欲を満たす気になつたらしい。小皿に醤油を垂らし、箸でマグロの刺身にワサビを載せ、それを醤油に付けてから口に入れていた。

「んーっ!」

どうやら、ワサビがまとも効いたようだ。咀嚼しながら、顔を顰めている。

「何よ?」

表情がくるくる変わる変わる砂夜を観察していたら、見事に目が合ってしまった。

俺は口の端を上げながら、「別に」と短く答え、小鉢に入っているほうれん草とシラスの和え物を箸で摘まんた。

「何かム力つくんだけど、その不敵な笑い方」

ビールを喉に流し込んでから、砂夜は、唇を尖らせながら、俺を恨めしげに上目で睨んだ。

「お前が面白過ぎるからだよ」

俺も、砂夜に倣うようにビールを一気に呷った。ようやくコップ

が空になったので、二杯目を注ぐと、瓶に手を伸ばしたら、さすが砂夜に取り上げられてしまった。

「手酌なんてしたら出世しないよ、お兄さん」

気持ち悪いほどに満面の笑みを浮かべた砂夜は、俺がコップを差し出す前に、強引に、琥珀の液体を注いでゆく。コップ七分目まで入った所でビールがなくなった。

「すいませーん！ ビール一本お願いしまーす！」

砂夜は、空になった瓶を右手で振りながら、大声で追加注文を申し付けていた。

おいおい、ここは居酒屋じゃねえんだから、と、俺は心底突っ込みを入れたかったが、酒が入って気分が良くなっているであろう砂夜に、変に口出しするのもどうかと思い、敢えて黙っていた。

二時間ほどかけて、ゆつくりと食事をした俺と砂夜は、並んで夜道を歩いた。

結局、二人で瓶ビール四本、更にぬる燗を一本頼み、飯共々、綺麗に平らげてしまった。だが、これぐらいの量ならば、大して酔っ払った気分にはならない。

俺以上にザルの砂夜も、素面の時と変わらず、足元がすっかりしている。ただ、若干テンションが上がっているようには思えるが。

「ねえ。酔い覚ましがてら、ちよつと歩こつか？」

砂夜はそう言うと、突然、俺の手を取った。

今まで、二人で呑みに行ったり飯を食いに行く事はよくあったが、手を握られる事なんて全くなかった。それだけに、砂夜の行動に、俺は驚きを隠せない。

「まさかお前、酔っ払ってる……？」

探るように訊ねると、砂夜はいつもの調子で、「酔っ払ってるに決まってんじゃーん！」と、ケラケラ笑った。

「もうね、今はすつごく楽しい！ やっぱ、宮崎と一緒にいると最高だわ！」

「そりゃどうも」

「ちよつとあんたテンション低過ぎ。もうちよつと楽しそうにしてよ」

「いや……、楽しそうに、って言われても……」

俺は複雑な心境で、視線を落とした。その先には、しっかりと俺の手を握っている砂夜の手がある。

砂夜は一瞬、不思議そうに首を傾げていたが、すぐに俺が手を繋がれている事に戸惑っているのに気付いたらしい。

「嫌なの？」

先ほどまでの笑いを引つ込め、砂夜は、神妙な顔付きで俺を見つめてきた。二年間、同僚として、そして、気の合う友人として付き合ってきたが、今のような表情を見せた事は、未だかつてなかった。瞬間的に、俺は、砂夜から 女 の匂いを感じた。

何も言えなくなった俺に、砂夜は、眉根を寄せながら続けた。

「私はずっと、宮崎が好きだった。あんたに出逢うまでは、異性になんてそんなに興味が湧かなかったけど、宮崎だけは、一緒にいるだけで嬉しくて楽しくて、幸せだった。

だから言えなかった……。宮崎は……。私を 女 として見てなかったのにも気付いてたから……」

そこまで言うと、砂夜は俺から手を放し、肩からかけていたバッグから、徐に何かを取り出した。

出てきたのは、手の平に埋まりそうなほど小さな白い箱だった。

「受け取って……。この中に、私の精一杯の気持ちが入ってるから……」

あまりにも急な告白に困惑している俺の手に、砂夜が箱を包み込んできた。

「ごめん……」

やっとの思いで出たのは、謝罪の言葉だった。自分でも、何故、そんな事を言ってしまったのか、全く分からなかった。

砂夜は、これをどう受け止めたのだろう。一瞬、わずかに瞳を揺

らし、けれどもすぐに、いつものように満面の笑みを浮かべた。

「別に謝る事なんてないって！ てか、あんたを困らせたのは私なんだから！」

砂夜は踵を返し、俺に背を向けた。

「悪いけど私、先に帰るわ。あ、迷惑だと思ってんなら、それ、捨てちゃって」

振り返る事なく、砂夜が、一步、また一步と、俺から離れてゆく。俺は咄嗟に、砂夜の手首を掴んだ。

砂夜は、こつちを見た。笑顔はそのまま。頬には、一筋の涙が伝っていた。

「お願いだから……、追い駆けて来ないで……」

俺の手をそつと解くと、砂夜は今度は、足早に俺の元を去ってしまった。

けれども、砂夜を追う気力は、その時の俺にはなかった。ただ、その場に立ち尽くしたまま、空を仰ぎ見る。

辺りに広がる満天の星空、そして、白銀色の雪の結晶が、フワリと舞い降りてきた。

重い気持ちを抱えたまま、アパートに戻った俺は、石油ファンヒーターを点けると、コートだけ脱いで、そのまま座布団の上に胡座を掻いた。

砂夜の精一杯の気持ちが入っているという白い小箱。一体、中には何があるのか。

俺は、期待と不安、二つの対照的な想いを抱えながら、ゆっくりと蓋を開けた。

中から現れたのは、シルバーメッキのジッポーだった。よく見ると、Love forever という英語が、控えめに刻印されている。

俺はヘビースモーカーではないが、ストレスが溜まったり、酒を口にすると、無性に煙草を吸いたくなる衝動に駆られる事がある。

砂夜も当然、その癖を知っていた。けれども、煙草を嫌悪している砂夜は、俺が吸おうとすると、「身体に悪いよ！」と、顔を顰めながら説教する。説教されても、結局は、右から左に聞き流し、吸ってしまっていたのだけだ。

だから、煙草嫌いの砂夜がジッポーをプレゼントしてきた事に、俺は驚いていた。しかも、決して安いとは言えない物だ。

「これじゃ俺に、『どどん煙草を吸ってね』って言うてるようなもんじゃねえか……」

俺は独りごちながら苦笑いし、箱からジッポーを取り出した。金属特有の重みと同時に、ひんやりとした感触が、手を通して伝わる。ふと、箱の底に、二つ折りにされた紙切れが入っているのが目に飛び込んだ。

「何だこれ……？」

俺は首を捻りながら、ジッポーを握り締めた反対側の手でそれを摘まみ、ゆっくりと開いた。

お誕生日おめでとございます。

あなたがこの世に生まれた素敵な記念日、これからも一緒にお祝いさせてくれませんか……？

短い、けれども、俺を心を揺さぶるのに十分過ぎるほど、砂夜の切々とした想いが、そのメッセージには籠められていた。

それなのに、「ごめん」という、残酷で簡単な一言で済ませてしまった俺。どれほど砂夜を傷付けてしまっただろう。

「また明日、ちゃんと顔を合わせて話そうか……」

俺は自らに言い聞かせ、メッセージと共に、ジッポーを箱に戻した。

突然、スーツのジャケットの内ポケットに入れたままにしていた携帯電話が、ブルブルと震え出した。

俺はハツとして顔を上げ、目に飛び込んだ壁時計を見遣る。どうやら、二時間ほど、ローテーブルの上でうつ伏せになって眠ってしまっていたらしい。

携帯は、相変わらず震え続けていた。

俺は、内ポケットを弄って携帯を出すと、出る前に着信相手を確認する。しかし、未登録の相手だったらしく、名前ではなく、携帯番号が表示されていた。

「もしもし？」

いつも以上にトーンを落として電話に出た。もしかしたら、間違い電話なのでは、と思い込んでいたのだ。だが、すぐに、間違い電話ではなかった事に気付いた。

『あ、もしもし宮崎君？ 倉田くわいたです』

俺とは対照的なソプラノボイスで、相手は最初に名乗った。

倉田という名前は、よく知っている。同じ職場の、三歳年上の女性社員だ。

「はい。宮崎ですけど……。どうしましたか？」

携帯番号を知っている事にも少なからず驚いたが、それよりも、急に電話をかけてきた事の方が、より気になった。

『 宮崎君………』

そこまで言いかけて、倉田さんは押し黙ってしまった。

「あの、倉田さん……？」

このままだと、延々と沈黙を守ったままになりそうだ。俺はそう思い、電話の向こうの倉田さんに呼びかけてみる。

『 宮崎君………』

また、先ほどと同様、俺の苗字を口にするのみだった。

じれったい。しかし、急かす気にもなれず、倉田さんから話を切り出すまで、こちらもジツと携帯を耳に押し当てていた。

『 宮崎君、落ち着いて聴いてね？』

ようやく意を決したのか、倉田さんが口を開いた。

『 砂夜……、死んじゃった………』

一瞬、何を言われたのか理解出来なかった。

俺は呼吸を整えると、「もう一度言ってくれませんか？」と訊いた。

「 だから……、砂夜が死んだ、って……」

何度も言わせないで、というニュアンスを籠めて、倉田さんは繰り返す。

俺の中で、何かが崩壊した。

倉田さんは冗談を言っている。そう思ったかった。しかし、彼女はつまらない嘘は吐かない人だ。ましてや、人の死を軽々しく口にするなんて事は、絶対に有り得ない。

「 宮崎君……? 」

俺からの反応がなくなつた事に、今度は倉田さんの方が気になつたらしい。電話の向こうから、恐る恐るといった感じで、俺に呼びかけてきた。

「 聴こえています……」

辛うじて口にしたが、自分でも、声が掠れ、震えているのが分かった。

恐らく、倉田さんにも俺の動揺は伝わったはずだ。倉田さんは心配そうに、けれども、気丈に続けた。

「 明日、ごく近い身内だけで仮通夜をやって、明後日に本通夜、明々後日に葬儀と火葬をするそうよ。宮崎君、砂夜とは凄く仲が良かったし、顔を見せてあげて。砂夜もきつと喜ぶから……」

「 分かりました……」

倉田さんの言葉に、俺はやはり、上の空で答える。

最後に、「それじゃあね」と、別れの挨拶をされて通話が途切れても、携帯を耳から放せなかった。

右手には、変わらずにジッポーが握られている。ずしりとした重みが、俺の心に突き刺さった。

翌日は、いつも通りに出社した。一見、いつもと変わらぬ光景だ

が、そこには、いるはずの人間が一人欠けていた。

砂夜がない。けれども、この時の俺はまだ、単純に風邪でも引いて欠勤したのだと思い込んでいた。いや、思いたかった。

砂夜の仮通夜には、定時で上がってから、昨晚に電話をしてきた倉田さんと共に行った。本通夜ではないから、実家で密やかに行うらしい。

砂夜とは、よく呑みに出かけていても、実家に行くのは初めてだった。しかも、亡くなってからお邪魔する事になるうとは、随分と皮肉な話だ。

家を訪れた俺達を迎えてくれたのは、砂夜の母親だった。砂夜よりは大人しそうな印象があるが、目元はやはり、よく似ている。

多分、自分が腹を痛めて産んだ娘だけに、母親の方が断腸の思いでいる事だろう。しかし、俺達には哀しい顔を見せる事はなく、寧ろ、口元に笑みさえ浮かべていた。それがまた、相当の無理をしているのではないかと、見ているこっちが痛々しい。

砂夜は、案内された一階の一番奥の八畳間の座敷で、静かに横たわっていた。そのすぐ後ろには祭壇があり、信じたくなかった現実を突き付けられる。

「綺麗な顔してるね……」

砂夜の前に正座するなり、倉田さんが、囁くように言った。

母親の話だと、家に帰る途中で酒気帯び運転をしていた車に撥ねられたとの事だったから、事故後は、目を逸らしたくなるほどの凄惨な姿だったに違いないが、今は、傷痕を消してしまうほどに化粧を施され、倉田さんの言う通り、息を呑むほど綺麗だと思った。

本当に、物言わぬ人形 そのものだ。

俺は、砂夜の頬に手を伸ばした。躊躇いつつ、けれども、ゆっくりと触れる。

昨晚とは違う、柔らかさも、温もりも持ち合わせていない。

今すぐ、抱き締めて温めてやりたい。俺は思ったが、出来なかった。

倉田さんや、砂夜の家族がいるから、というより、砂夜をこの腕に抱いてしまったら、二度と離したくなくなりそうだったから。

俺は砂夜の頬から手を放すと、正座した膝の上で、強く拳を握り締めた。

あの時、どうして砂夜の想いに応えてやれなかったのだろう。

何故、砂夜を引き留められなかったのだろう。

もし、無理にでも砂夜を留めていれば、今日もいつもと変わらず、あの屈託ない笑顔を俺に向けていてくれたはずなのに

今はもう、砂夜に対する罪悪感しかない。

非があるのは、砂夜を轢き殺した相手だ。しかし、俺はその相手よりも、俺自身を深く恨んだ。

俺が砂夜を殺した

その想いに囚われたまま、俺は一年間を過ごし続けた。

第三節

「永瀬はきつと、俺を今でも恨んでる……」

俺は相変わらず、公園のベンチに坐つたまま、砂夜から贈られたジッポーを見つめ続けた。

自称 天使 も、先ほどまでの剣幕からは想像出来ないほど、神妙な顔付きで俺を見下ろしている。

「けど、俺はいい加減な気持ちで永瀬に伝える事も出来なかった……。永瀬が、あまりにも真つ直ぐに俺を見つめていたから、尚更……。」

最期に見た永瀬の涙も、未だに忘れられない……。俺の心に突き刺さつて、ずっと離れな……」

全てを言い終える間もなく、俺は、嗚咽を漏らした。

仮通夜の時だけではなく、本通夜の時も、葬儀の時も、火葬の時も全く泣けなかったのに、今になって、涙が止めどなく零れ落ちてゆく。

砂夜がこの世から消えてしまつてから気付いた想い。俺にとつて、砂夜がこれほどまでに大きな存在だったとは、考えもしなかった。

と、その時、俯きながら涙を流す俺を、仄かな温もりが包み込んできた。

自称 天使 に、抱き締められていた。まるで、我が子を慈しむように。

「恨むわけ、ないじゃない……」

自称 天使 の声が、穏やかな川のせせらぎのように、ゆっくりりと流れ込んでくる。

「私は、ずっとあなたを見てた。私のために、苦しみ続けてきた姿を……」

俺は、ハツとして、涙で濡れた顔を上げた。

そこには、金髪と蒼い瞳を持つ天使の姿はなく、代わりに、肩よ

り長めの黒髪に、茶味を帯びた双眸の女が、穏やかな笑みを湛えながら立っていた。

俺は、声を発するのも忘れ、瞠目したまま女を見つめる。

「ビックリした？」

女は肩を竦めながら、俺に訊ねてきた。

俺はやはり、茫然としたまま、ゆっくりと首を縦に振る。まさか、こんな所で砂夜と再会するとは、夢にも思わなかった。

「天使　なんて柄じゃないでしょ？」

つい先ほどまで、『こーんな麗しい容貌を持った魔物がどこにいるってんだいっ？』などと、踏ん反り返っていたのが嘘のように、砂夜は、照れ臭そうに頬を指先でポリポリと搔いている。

「ほんとは、この姿のまままで宮崎の前に出るつもりだったんだけど……、いきなり出たら、宮崎が怯えて逃げちゃうんじゃないかって思っで、全く違う姿に化けてみた。でも、どっちにしても脅かしちゃったのには変わりなかったみたいだね」

悪戯っぽく笑う砂夜に、俺もようやく、「卑怯じゃねえか」と、苦笑いを浮かべるだけの余裕が生まれた。

「けど、どうして天使なんだ？　幽霊として出てくるってんならまだしも……」

「何それ？　だったら私に化けて出てきて欲しかったわけ？」

「いや、そうじゃなくて……」

口調は、俺の前に出てきた時よりはソフトになっていたが、どちらにしても、俺を黙らせてしまうほどの気の強さは、生前と全く変わっていない。

どうしたものかと頭を抱えていると、砂夜から、クスクスと忍び笑いが漏れてきた。

「ほんと、宮崎って相変わらずからかい甲斐があるわ」

砂夜は、笑みはそのまま、俺の隣に腰を下ろした。

「宮崎と別れてから、私は、ただひたすら歩いてた。どんなに力んでも、涙は止まるどころか、どんどんと溢れてくるんだもん。凄く

困っちゃった。

泣いて、ずっと泣いて、段々と体力も消耗されてきちゃったんだね。すっかり注意力がなくなってる、気付いたら……、自分のすぐ目の前に、眩しい光が猛スピードで迫ってた……」

ここまで言うと、砂夜の表情がわずかに曇った。

考えるまでもない。それからすぐ、砂夜の生命の灯は消えてしまったのだ。ほんの数秒という、一瞬の時間で。

砂夜もきつと、その時の事を想い出すのは辛いに違いない。俺はそう思っていたのだが、全てを伝えなくてはならないという強い意志が働いたのか、砂夜は、一呼吸置いた後、再び口を開いた。

「車に撥ねられたほんのわずかな間に、赤ちゃんの頃から今までの記憶が一気に駆け巡った。所謂、走馬灯 ってやつね。その瞬間に、ああ、私はこのまま死んじゃうんだな、って改めて実感した……」

ほんとには、まだまだやりたい事があつたし、生きていたかったけど、これも私の運命なんだって思ったなら、自分でも驚くほど、そんなに受け入れてた」

砂夜は手を伸ばし、俺の頬にそつと触れてきた。

「生きてるうちに、宮崎に私の想いを伝えられた。それだけでも最高に幸せだった。もし、何も出来ずに死んじゃってたら、今でもずっと、魂だけの存在になって、この世を彷徨い続けてたと思うから……」

にこやかに語る砂夜に、俺は眉を顰めた。

何故、幸せなんて言える？

俺は、砂夜を傷付けてしまったのに。

それなのに、どうして笑えるんだ……？

「どこまでお人好しなんだよ……！」

気付くと、俺は砂夜の華奢な両肩を、力を籠めて掴んでいた。そ

の拍子に、手に持っていたジツポーと手紙が、箱ごと地面に落ちた。
「俺は、お前に酷い事をしたんだぞ？俺があの時、自分の気持ちにちゃんと気付いていたら、お前は……、今でもここにいたかも知れないのに……！」

肩を揺さぶられた砂夜は、俺の手を振り払う事もなく、ただ、哀しげに笑みながら首を横に振るだけだった。

「宮崎の気持ち、凄く嬉しいよ。けどね、決められた宿命さだめを覆す事は、例え神様であっても出来ないのよ。もちろん、時間を戻す事だって……。」

私が宮崎の前に現れたほんとの目的は、私のために、ずっと苦しみを抱えたまま生きて欲しくない、って伝えたかったから……。

宮崎が宮崎自身を恨み続けている姿は、見ているこっちが一番辛いもの……。ボケているようで、実は結構思い込みが激しいのも知ってるから……。ちよつとしたきっかけで、間違いを犯すんじゃないか、って、凄く心配だった……。」

砂夜の指摘に、俺の鼓動が強く波打った。

確かに、ほんの一瞬でも、砂夜を轢き殺した相手に報復してやりたいとか、自分の存在もこの世から消してしまおうとか考えた事はあった。けれども、実行には移さなかった。やはり、心のどこかでそんな事しても砂夜は決して喜びはしないであろうと分かっていたから。

「俺は、どうしたらいい……？」

絞り出すように、砂夜に訊ねる。

砂夜は、俺を真っ直ぐに見据えたまま、「幸せになればいい」と答えた。

「私の分も生きて、私の分までうんと幸せになってくれれば、私はそれだけで十分。」

宮崎はまだ若いんだし、これから、私よりももっと素敵な人を見付けて、その人と温かい家庭を築いて、悔いのない一生を過ごしてくれれば……。」

砂夜の指先が、俺の輪郭をゆつくりとなぞる。

俺は愛おしさが込み上げ、その手を握り締めた。

砂夜は瞠目した。今の彼女は、俺の心が読める。ならば、この先に何をしようとしているかは、既に察しが付いているはずだ。

俺は、もう片方の腕で、砂夜の肩を抱き締める。先ほどとは違い、壊れ物を扱うように、優しく抱き寄せた。

砂夜の瞳が閉じられた。微かに、唇が震えている。

俺も躊躇いつつ、砂夜に口付けた。

初めてで、これから、二度と触れ合う事のない唇と唇。この柔らかくて温かな感触を忘れたくない。俺は、祈るように強く想った。

長い時をかけて、どちらからともなく唇が離れた。

「そろそろ行かないと……」

砂夜が立ち上がるうとするのを、俺は、咄嗟に腕を掴んで引き止めた。

「あの時と進歩ないよ、宮崎……」

困ったように、砂夜が苦笑いする。多分、今の俺は、今にも泣き出してしまうような顔をしているに違いない。

「私は見守ってる。宮崎の事をずっと……。姿は見えなくても、私はちゃんと、宮崎の側にいるから。だから心配しないで」

砂夜は一度、その場に屈み込んだ。何をするのかと思ったら、落ちたままになっていたジツポー入りの小箱を拾い上げ、俺の手に握らせた。

「これも、捨てる気がないならちゃんと使ってやってよ。箱に仕舞いつつ放しじゃ、ただの宝の持ち腐れだよ？」

特注で文字入れして貰ったから高く付いたんだから、と、最後に付け足した。

俺は、再び渡されたジツポーを見つめ、Love forever

「強く生きな」

砂夜は俺の手をそつと解き、身体をふわりと宙に浮かせる。と、背中から、一對の翼が姿を現した。

俺を振り返る事もなく、強気な天使は、星空に向かって羽ばたいてゆく。

砂夜の姿が完全に見えなくなるまで、そう時間はかからなかった。砂夜は、今度こそ、俺から離れて行ってしまった。

残されたのは、ジッポーと手紙だけだった。

「 Love forever……」

俺は独りごちると、初めて、ジッポーを点火させた。カシャリと音が鳴り、橙色の炎が、風に煽られながら揺らめく。

その時、目の前に一粒の欠片がポツリと落ちてきた。

俺は夜空を仰いだ。星が瞬く中、生まれたての雪が、一つ、また一つと舞い降りる。

まさかとは思った。けれども、偶然にしては良く出来過ぎている。

「 砂夜……? 」

一度も、本人に呼んだ事のない下の名前で問いかけるが、返事は戻ってこない。

「 俺への誕生日とクリスマスプレゼントってトコか? 」

ついさっきまで感じていた哀しみは嘘のように、俺の心に、温かな気持ち広がっていた。

俺は、ジッポーに向けて、白い息を吹きかける。ケーキはないが、ささやかな蝋燭代わりだ。

砂夜、お前は、時間は戻せない、って言った。

けど、生まれ変わりだったら有りだよな?

俺とお前、縁があるのなら、来世では一緒に幸せになろう。

その時は、俺からお前に言っただけだよ。

永遠に、お前を愛してる

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9372z/>

Love forever

2011年12月29日11時49分発行